

## 日本のアーカイヴズ論

全国大学史資料協議会編  
 京都大学学術出版会 2006年12月  
 A5判 424P 本体4,800円

本書は日本における大学アーカイヴズをめぐる議論と現状を、その実務に携わる担当者の視点からまとめたものである。日本の大学アーカイヴズについて取り上げたものとしては、本書が最初の試みであろう。編集・執筆にあたった全国大学史資料協議会は1988年にその前身が創立され、2005年現在、83の大学と40名の個人会員が参加する団体である。

日本の大学史に関する活動には、多くの場合年史編纂事業が密接に関係してきた。大学史に関する先行書である『大学史をつくる—沿革史編纂必携』（寺崎昌男・別府昭郎・中野実編 東信堂 1999年）が、年史編纂にその焦点を絞っているのも、大学史のそうした来歴に基づいている。

しかし年史編纂は元来時限的な事業である。大学史をめぐる活動を一過性のそれに留めず、編纂で得た蓄積を基礎に、資料を収集・保存・活用していく恒常的な大学アーカイヴズへと結びつけていくにはどうしたらよいか。それが1990年代後半以降、年史編纂事業の終了した多くの大学において課題となった。また、近年の大学改革や情報公開の動きなども、こうした課題についての認識をより深めていくことに寄与したのは言うまでもない。これらの状況を背景として、大学アーカイヴズの設置に向けた歩みは「広がり」と「深まり」を帯びつつ進められてきたのであった。

しかし大学アーカイヴズとは、まだ流動性を抱えた新しい分野である。協議会所属の各大学においてもその議論は多様で、本書の論者の方向性も必ずしも一致しているわけではない。その意味で本書は「大学アーカイヴズ」とは何か、という問いにそのまま答えるものではない。一種混沌とした状態にある大学ア

ーカイヴズの現在をひとまず紹介し、そのことを通して今後の可能性を探る手がかりとしたい、というのがわれわれの偽らざる思いであり、本書の主な狙いである。

本書の構成は3部からなる。第1部の「大学アーカイヴズ論」においては、大学アーカイヴズの現状、歴史、資料論、展示論、大学史と地方・地域、大学アーカイヴズへの理念的提言をめぐる下記7本の論考を収録した。西山伸「大学アーカイヴズ」の現状と今後」、桑尾光太郎・谷本宗生「大学アーカイヴズのあゆみ」、永田英明「大学アーカイヴズ資料論」、神谷智「大学アーカイヴにおける資料の収集・整理・保存・公開について」、秋山俱子「大学史資料と展示—展示による資料公開の方法」、鈴木秀幸「大学史活動と地方」、森本祥子「大学組織のアーカイヴズ：理論と実践の提示への期待」である。

第2部「大学アーカイヴズのいま」においては、現在の大学アーカイヴズの相貌と見取り図を示すことを目指した。そこで31の機関を選び、設置経緯、組織（体制）、活動内容、所蔵資料、今後の課題等についての各種報告を収めた。ここには協議会加盟校以外に、恒常的な形で大学アーカイヴズに類する活動をおこなっている学校の活動も合わせて収録した。さらに第2部では、8機関の所蔵する貴重資料に関するコラムも掲載した。

第3部「基本データ」においては、2003年に協議会の実施した「大学アーカイヴズ」に関するアンケート」への各機関の回答をもとに、連絡先などの基本的な情報と資料の利用にあたって必要な情報等を掲載した。第3部は各大学アーカイヴズに関する現状を提示するだけでなく、当該機関利用者へのガイドブックとしての役割も持たせた。

多くの方に本書に眼を通していただきたく思う。大方のご叱正を乞う次第である。

西山 伸・京都大学大学文書館